
研究ノート

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにおける
「厚い記述」への近接

—コーディングにおける談話研究の分析概念の援用とその効果—

An Exploratory Study on a Way toward “Thick Description”
in Modified Grounded Theory Approach (M-GTA):

The Use and Its Effects of Analytic Concepts of Discourse Studies
in Data-Coding

石黒 武人^{1)*}

Taketo ISHIGURO^{1)*}

Abstract

The purpose of this theoretical paper is to demonstrate how analytic tools such as “frame” (Goffman, 1981), “footing” (ibid.), “contextualization cues” (Gumperz, 1982), and “meta-message” (Bateson, 1972) often used in the fields of discourse analysis and linguistic anthropology can be applied to data-coding in a sociological research called “modified grounded theory approach” (M-GTA, Kinoshita, 2003) as an effective way to attain so-called “thick description” (Geertz, 1973). “Thick description” requires researchers to analyze and interpret social and cultural aspects often indirectly expressed in interview data. Those analytic tools mentioned above can facilitate researchers to capture and closely look at social and cultural indexes which deepen and enrich the processes of analysis and interpretation of interview data and thus achieve a type of “thick description.” M-GTA has an interesting tool of data analysis named, “analytic worksheet,” which induces its users to pay more attention to contextual features of interview data. In this paper, this worksheet in combination with the above-mentioned four discursive analytic tools enabled the author to show an example of deep interpretation and “thick description” that indicated not only some overt referential features of a selected part of interview data but also covert social and cultural features embedded in the data.

¹⁾ 順天堂大学 国際教養学部 (Email : t-ishiguro@juntendo.ac.jp)

* 責任著者 : 石黒 武人

[September 16, 2016 原稿受付] [December 22, 2016 掲載決定]

Key words

M-GTA、厚い記述、言及指示、社会指標、談話分析

M-GTA, Thick description, Referential index, Social index, Discourse analysis

1. 問題の所在および本稿の目的

本稿は、木下（2003）が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（modified grounded theory approach, 以下略して M-GTA）に、文化の解釈を射程とする分析概念を接合し、後述する「深い解釈」ひいては「厚い記述」を可能にするための方法を提案する一試論である。文化を記述、解釈する研究が議論される際に、引きあいに出されるのが、文化人類学者クリフォード・ギアーツ（1973）が哲学者ギルバート・ライルの表現を用いて示した「厚い記述（thick description）」である。

厚い記述は、対象とする集団の文化について単にディテールが書かれたものではない（cf. 佐藤，2008）。厚い記述は、対象となっている集団の一見不可解な社会的表現を理解可能な形に変えるため、目に見えない文化的な営為を解釈して示すことである（cf. 木下，2005）。佐藤（2008）の表現を借りれば、「どのようなもの」で「どうなっているか」という表層的な記述だけではなく、「なぜ、そうなっているのか」（p. 13）という文化の深層にかかわる記述である。

木下（2003; 2005; 2007; 2014）は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（grounded theory approach, 以下 GTA, cf. Glaser & Strauss, 1967, Glaser, 1978; 1992, Strauss, 1987, Strauss & Corbin, 1990, Charmaz, 2006, 戈木, 2006）の提唱者であるグレーザーとストラウスによる『データ対話型理論の発見』（オリジナル版、1967年発表）の枠組みを継承しつつ、そこでは十分に示されなかった「文脈性」（木下，2007, pp. 30–31）を重視した分析や「研究する人間」（木下，2003, pp. 43–53）の位置づけを明示し、「深い解釈」や「分厚い記述」（木下，2009, p. 19）を実現しようと試みている。換言すれば、

M-GTA において、まず重要視されるのが「解釈の厚み、深さ」（木下，2009, p. 19）である。

しかしながら、この厚みや深さに至る分析・解釈の具現化が多く研究者にとって難題である。とりわけ、コーディングといわれる、インタビューの一部をその部分の特徴を適切にいいあて概念化する過程において、解釈の深さを妨げうる2つの傾向が見られる。まず、1つ目の傾向として、背景にある文化を含めた文脈的要素の多くが捨象され、インタビューで語られたこと（what is said）を単に整理して概念化するパターンである。その場合、語られたことに介在している社会・文化的コンテクストを読み取り、解釈の深さを出す学術的営為が欠落し、記述に厚みが出にくい。

また、2つ目の傾向として、これまで提示されてきた社会学的解釈のレパトリー（マイノリティに関する理論など）をデータにあてはめて解釈する営みを主とした研究がある。これは、既存の解釈レパトリーや理論（グラウンド・セオリー）に、データが適切にあてはまる際に活用されるアプローチであるが、データが既存理論では説明できないような新規な側面をもっている場合にも、その新規性を無視し、もしくは無意識に見過ごし、既存理論の説明で新規性を回収してしまう危険性を孕んでいる。

前者の「語られたこと」のみに焦点化した帰納的なコーディングも、後者の既存理論をあてはめる forcing（cf. Glaser, 1992）な演繹的なコーディングも M-GTA が志向する grounded-on-data で、かつ、深い分析・解釈につながりにくい。そもそも GTA は、先行研究に依拠した仮説を検証して提示される抽象的理論であるグラウンド・セオリーに対抗し、データから立ち上がる（emergent）仮説を生成するためにコーディン

グをし、ある特定の集団、領域に属する人びとの意識や行動を説明、予測する領域密着型理論を作り出すねらいがあり登場した。それゆえ、GTAを用いる多くの研究者の傾向としては、データから立ち上がる概念を生成するコーディングのやり方を強く意識するあまり、既存の分析概念を安易に適用しない傾向がある。したがって、実はデータと対話し、背景にある文化を含めた深い分析・解釈の助けとなる他領域の分析概念をGTAと併せて援用しづらい状況があると考えられる。

以上の状況を踏まえ、本稿の目的は、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」に、他分野である談話分析や言語人類学の分析概念を接合し、深い解釈と厚い記述を試みることである。この試みは、分析概念をデータにあてはめて、その特徴を説明するforcingな営みではなく、分析概念を使い、語られたこと (what is said) のなかに非明示に介在する文脈性 (社会関係、文化、アイデンティティ) を、インタビューの過程で語り手によって「なされていること」 (what is done) を手がかりに浮かび上がらせ、解釈に深みを出し、記述に厚みをもたせるものである。本論では、まず、M-GTAを概説し、つぎに、M-GTAに基づいて行ったデータ分析例を示す。その後、他分野の分析概念を用いてデータを再分析し、解釈した例を示し、他分野の分析概念を援用した領域横断的方法の効果を例証したい。

2. M-GTA

M-GTAは、インタビュー・データ (生データ) から複数の似通った具体例を同定し、それらの具体例を包括的に説明できる概念 (concepts) を生成し、つぎに、概念同士の関係性をいあてるカテゴリー (categories) を作り、さらに、カテゴリー間関係性を考察して現象 (対象としている人びとの意識や行動) を構成するプロセスを結果図として示す。アメリカのある大学付属英語研修プログラムに3週間参加した学生

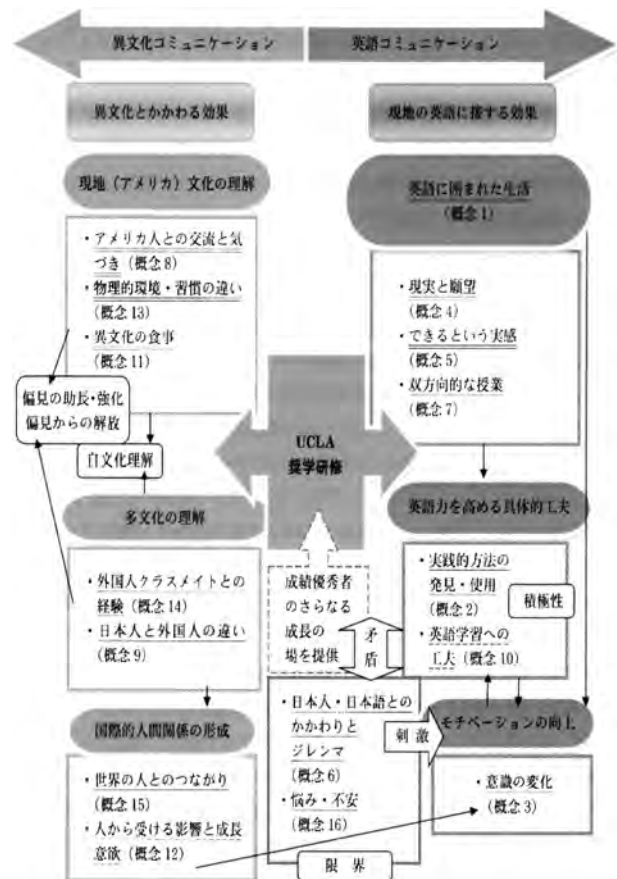


図1. 結果図の例 (UCLA 奨学研修における学生の経験) (石黒・山下・川成, 2012, p. 116 より)

の意識と行動の傾向を説明する結果図の例を見てみよう。図1では、概念 (例:「現実と願望」)、カテゴリー (「例:多文化の理解」)、プロセス (結果図全体) が示されている。

また、M-GTA 独自の試みとして、データの分析・解釈を深めるための「分析ワークシート」がある。分析ワークシートは、「概念名」、「定義」、「バリエーション」、「理論的メモ」という4つの項目によって構成される (次頁の表1)。具体的な手順としては、まず、インタビュー・データから研究の目的に応じて抜き出した事例を分析ワークシートの「バリエーション」に書き入れ、複数の類似した事例を説明できる「定義」を考案し、定義を短く伝える「概念名」を案出する。したがって、「概念名」がバリエーション、

表 1. 分析ワークシートの例
(木下, 2007, p. 241 の表を基に筆者が作成)

概念名	夫介護者への社会的関心の広がり
定義	夫が家事介護をしていることに外部者が関心を持ち始めたことへの驚き
バリエーション (具体例)	*夫の方が家事や介護をしてるっていう点ね。まあこれからの社会、こういうのは当たり前になるんでしょうけどね、やはりこの夫の方がっていうところでちょっと、あの一、もう研究の手って言うかね、あの一関心を持っている人達もいるんだなってことが、あの一、ちょっと驚きでしたね。(A氏、1頁)
理論的メモ	・介護の当事者になると、自分の日常生活空間とその中での生活が中心となり、関心が内側方向に、時には、閉塞的になりやすいが、自分の現在の状況について外側からの関心が示されていることに気が付くのだとすれば、その意味は何か？ (以下省略)

つまり、データに基づいて生成されるのである。さらに、バリエーション（事例）同士の関係、概念と他の概念の関係などに関するデータ分析中に想起するアイデアをメモし、研究における思考過程を外在化し、記述する箇所が「理論的メモ」である。

分析ワークシートを用いることで、どのデータから概念が生成され、生成のプロセスでいかなる思考過程があったかを明示化できる。これは、ブラックボックス化しがちであった概念生成の過程をオープンにでき、研究を評価する読み手や理論（結果図）を用いる応用者たちが、概念、カテゴリー、結果図の妥当性を検討しやすくする。

3. 分析概念導入の前提・妥当性

本節では他領域の分析概念を M-GTA の分析ワークシートに接合する前提や妥当性について 2 つの観点から論じる。まず、インタビューの「社会指標的側面」（シルヴァスティン・小山,

2009, p. 31) をとらえることが深い解釈と厚い記述に至る鍵となるという観点から、社会指標的側面を浮かび上がらせる分析概念の必要性を述べる。つぎに、M-GTA が提示する「インタラクティブ性」や「研究する人間」という方法概念の論理的帰結として、M-GTA への分析概念の導入が M-GTA の提唱者である木下によって許容されうるものである点について言及する。

3.1. 記述の厚みを生む社会指標的側面

記述の厚みを生む深い解釈とは何であろうか。シルヴァスティン・小山 (2009) が提示したコミュニケーションの言及指示的側面と非言及指示 (社会指標) 的側面という見方に依拠し、深い解釈について考察したい。インタビューやその他のテキストが構築されるプロセスでは、語り手がなんらかの対象をことば (や非言語) で指し示し、その対象について述べる。その「いわれていること (what is said)」を言及指示的側面といい、いわれていることと重なりあうように同時に行われていること、「なされていること (what is done)」を社会指標的側面という。たとえば、日本語話者の若者によって使われる傾向にある「マジで」という語彙を伴う発話行為は、その行為自体がその使用者がもつ社会 (世代) 的アイデンティティを明瞭に指標する (別の世代 [高齢者] が用いると、また特別な意味が指標される)。コミュニケーションで指標される文化的営為を理解するには、言及指示と社会指標の両側面をとらえる必要がある (cf. シルヴァスティン・小山, 2009)。

一般に、社会指標的側面は、語りの背景にある社会関係、社会的アイデンティティ、文化的規範などを表し、それらは多くの場合非明示的に (多くの場合、なにげなく、自然に) 表現される。そうした指標の意味を読み解くことで、言及指示的側面と社会指標的側面双方がコミュニケーションする内容をとらえ、文化の解釈が深まり、文化を体現する語り手の認識世界の理解に

つながる。したがって、社会指標的側面を浮かび上がらせるうえで有効な分析概念が必要となり、本稿では、社会指標性の分析、解釈の助けとなる分析概念を導入するのである。

M-GTA に他領域の概念を導入する妥当性を示すためのもう1つの前提として、M-GTA に修正を加えることに対する木下 (2007) の見方を説明する必要がある。そこで、「インタラクティブ性」(木下, 2007, pp. 88-99) という概念を用い、その妥当性について説明したい。

3.2. 研究目的に応じた方法の工夫

木下 (2007) は、客観的な分析を中立的な立場からできる存在として研究者を位置付けず、研究のプロセスと相互に影響を与えあう存在であるという見方を示し、「インタラクティブ性」及び「研究する人間」という概念を用いてその位置付けを説明する。

インタラクティブ性については、まず、1) 調査協力者と研究者の相互行為を介してデータが収集される点、2) データ分析における「分析焦点者」(木下, 2007, pp. 155-159) と研究者の関係、3) 研究者が提示する分析結果とその応用者とのかかわり、という3つの点について自覚的にとらえる枠組みが示されている。2) の「分析焦点者」とは、ある特定の集団に属する人びとが経験する現象や彼らの意識や行動を説明、予測するために、その集団に属する人びとを抽象化して表現した存在で、「実在するのではなく、解釈のために設定される視点としての他者」もしくは「内的他者」(木下, 2007, p. 92) である。

たとえば、「研究する人間」の目的に応じ「分析焦点者」として「日本企業に属し、3カ国以上の多国籍なメンバーで構成されるチームを率いる日本人リーダー」という人物像を設定することができる。その分析焦点者が「何をどのように経験するのか」「なぜそのような経験をするのか」といった視点から「研究する人間」がデータを分析・解釈するのである。

3) の応用者とのかかわりについては、理論を応用者に使ってもらい、その妥当性を検証するというプロセスを示すと同時に、理論が原理的に未完であり、常に応用者に対してオープンで修正・更新されうるものであることを示唆している。結果図を作成する際も、応用者の視点を意識しつつ、学術的な用語を応用者にもわかりやすいものに変えるといったメタ語用論的な発想も出てくる。

インタラクティブ性を敷衍して考えると、研究者の目的・関心というものが自覚的にとらえられていることの重大性に気づかされる。上記3つのインタラクティブ性には、「何に関心をもち、何を目的に研究を行うか」という研究者の意図が介在するからである。こうした研究する人間の意図性を「バイアス」とし、研究の妥当性を低下させるものとせず、それを自覚的にとらえ、積極的に認め、活用しようとするのが M-GTA の特徴である。そうであれば、研究する人間に「深い解釈」を実現するという意図がある場合、その意図に沿った分析概念を M-GTA の基本的な枠組みに導入するという理路が見えてくる。M-GTA を提唱した木下 (2007) 自身も以下のように述べている。

M-GTA は手順と技法の形式だけで成り立っているのではなく、基礎におく考え方によって形式が整えられているので、独自の考えに基づき工夫を施して自分の目的に適したものにしていくのは何の問題もありません (p. 11)。

次節では、他分野の分析概念を M-GTA の分析ワークシートと併用し、社会指標的側面の特徴を浮かび上がらせ、深い分析、解釈に至る例を示す。

4. 分析ワークシートと談話分析概念の併用

コミュニケーション (インタビュー) で動的に生成される社会関係、文化、アイデンティティ

を浮かび上がらせ、社会指標的側面を分析するうえで有用であると考えられる分析概念（①フレーム、②フットィング、③コンテクスト化の合図、④メタ・メッセージ）がある。フレーム（frame）は、ミクロ社会学者 Goffman（1981）が提示し、「各人の経験に基づいて構築されるもので、相手の意図を推論したり、解釈していく際に使われる社会的・文化的知識の枠組み（構造）」（高木，2008a，p. 222）を指し、談話分析や言語人類学でしばしば用いられる。フレームは「期待の構造（structure of expectation）」（Kramsch, 1998, p. 128）といわれ、ある場所（e.g., 職場）、場面（e.g., 会議）における参与者（e.g., 上司や部下）の役割（e.g., 評価する側、評価される側）を伴う。

フットィング（footing）は、フレームと同様 Goffman（1981）によって提示された概念である。Goffman によれば、人びとはコミュニケーションにおいてさまざまな言語・非言語行為を用い、自分と相手との関係を示し、変化させている。この関係づけをフットィングと呼ぶ（cf. 梅本，2008）。

コンテクスト化の合図（contextualization cues）（Gumperz, 1982）は「場面における話し手の発話を聞き手が解釈するうえで手がかりとする言語・非言語的伝達記号」（井出，2003，p. 223）のことであり、通例、複数の言語、非言語記号が共起して解釈の土台となる。たとえば、窓が閉まっている教室で花子さんが①衣服の袖をまくり（非言語記号）、②汗をぬぐうしぐさをし（非言語記号）、③「暑いね」と窓際の太郎さんを見て話しかけた場合（言語記号）、太郎さんは①から③の共起関係にある記号を土台にし、花子さんの「窓を開けて」という言外の暗示的メッセージを読み取るのである。

メタ・メッセージ（meta-message）は、Bateson（1972）が示した meta-communication に由来するもので、「言葉の命題的情報ではなく、言外に伝え合う、会話の参与者・状況・内容に対する態度、立場、視点などについての社会的

意味を指す」（高木，2008b，p. 237）。たとえば、日本人が週末映画に誘われ、「ちょっと今週末は難しい」といえば、日本の言語文化フレームに依拠して考えると、その社会的意味は「行けない」「断る」といった内容を暗示する。

では、以下に分析ワークシートを示し、まず、通常分析を行い、その後、社会指標性を射程とする分析概念を援用し深い解釈を試みる。表2では、多様な国の部下と働く日本人上司がインタビューで述べたバリエーションが示されている。この具体例の内容を整理して「定義」を考えると、たとえば、「外国人に対しては明示的な形で指示をする必要があること」と定義でき、概念名を「外国人に対する明示的指示の必要性」とし、日本人上司の思考の特徴を外在化して示すことができる。その際、「理論的メモ」として、「外国人とひとまとめにして述べているが、外国人でも明示的指示が必要ない者はいないのか？」といった対極例の可能性を理論的に考え、それを確認するデータ収集・分析の方向性を示すこともできる。

ではまず、「フレーム」を援用してみよう。この分析概念を用いて上記の具体例を読むと、たとえば、「外国人には明示的な指示をしなければならない」と考える日本人上司が実は前提としている文化的フレーム（期待の構造）が浮かび上がる。それは、「上司はすべてを言わなくてもよく、部下が上司の意図を察して期待通りもしくは期待以上の仕事をする」という日本社会にある1つのフレームである。より一般的に言えば、語り手の認識世界で機能している「察しの文化」がこのフレームの背景に見てとれる。これは、データに「察しの文化」というフレームをかぶせる演繹的な営みではなく、既述のとおりデータから帰納的に証拠立てていえることである。この「察しの文化」とは異なる文化をバックグラウンドにもっている人間に対して「明示的な指示をする必要がある」という異文化コミュニケーションのためのフレームも同時に機能している。さらに、察しの文化を背景と

表 2. 分析ワークシートの例

概念名	外国人に対する明示的指示の必要性
定義	外国人に対しては明示的な形で指示をする必要性があること
バリエーション (具体例)	* えー少なくとも外国の文化をバックグラウンドに持っている人間とはやっぱ書かなきゃいけないし、具体的にこれとこれをやったとか、フォーマット作るからここにこういうこと入れといてまで言わないといけない場面もありますし。(A氏)
理論的メモ	外国人とひとまとめにして述べているが、外国人でも明示的指示が必要ない人材はいないのか？

する上司の文化的アイデンティティが指標されると同時に、異文化にも対応できる考え方をもつ者としてのアイデンティティが示されている。以上のような文化やアイデンティティに関する解釈の深さ、記述の厚みが出てくる。

つぎに、フットینگを用いて分析する。「書かなきゃ」や「言わないといけない」といういい方は、部下に対して上司側から必要以上のことをしなければならぬ、つまり、上司側から相手に合わせる形でコミュニケーションをとらなければならない、という「上司が部下に合わせる」もしくは「上司が部下のやり方を尊重する」という上司と部下の関係づけが示されている。さらにいえば、「異文化を背景とする部下に合わせる日本人の上司」としてのアイデンティティがインタビューというコミュニケーションの場で達成されている。

さらに、コンテキスト化の合図を用いて分析・解釈を進めたい。まず、分析ワークシートの概念名として「外国人に対する明示的な指示の必要性」という概念名を本稿で仮に提示したが、その概念名の生成に至るまでの軌跡はどうなっ

ているのだろうか。コンテキスト化の合図という分析概念でその軌跡をたどってみると、まず、「書かなきゃ」「具体的に」「フォーマットを作るからここにこういうこと入れて」といった記号が共起関係にあり、明示性が求められていることが推論できる。また、語りには、概念名として採用した「指示」ということばはないが、「やって」「入れといて」という発話行為により、指示に関する内容であることがわかる。さらに「なきゃいけない」「まで言わないといけない」は「必要性」を推論させる。以上のように、分析・解釈における思考過程を外在化し、研究の読み手に対してより精緻に証拠立てながら「概念名」に至る推論の過程を示すことができる。

最後に、メタ・メッセージを用いて分析・解釈したい。命題的情報ではなく、言外に伝え合うという観点から、「外国の文化」とは対照となる「自国の文化」という想定がそこにはあり、上述したように明示性を必要とする「外国の文化」と対照的な関係にある「非明示的」表現を用いる傾向がある自文化が言外に伝えられている。さらに、「なきゃ」といった表現から、必要に応じて部下に合せたやり方に切り替え、異文化に対応する意識をもつ者というアイデンティティも指標されている。

以上のように、4つの分析概念を用いて、社会指標的な分析・解釈をデータと対話しながら実践することができた。その結果、分析ワークシートの記述も自ずと変わってくる。たとえば、概念名は、まさに言及指示的な「外国人に対する明示的指示の必要性」というものであったが、それを「異文化との差異を踏まえた明示的指示への切り替え」と書き換え、異なる文化間の関係性をより前景化して示す表現が可能となる。その関係性を踏まえ、上司が他者（部下）にあわせて指示の質を切り替える意識をもっていることをより明瞭に説明できる。「定義」は「外国人に対しては明示的な形で指示をする必要性があること」としていたが、「明示的な指示が好まれる異文化と曖昧に指示がなされる傾向に

ある自文化の差異を踏まえ、異文化に合わせて明示的な指示を選択する意識をもっていること」となる。「理論的メモ」も「指示以外にも文化的な相違点があるのか？指示以外にも、褒める行為、助言、フィードバックなどに相違点があれば、指示に限定せずとも、文化的差異を踏まえた『メッセージ』の切り替えといったより包括的な概念ができるのではないか？」といった考察にもつながる。

5. 結語

本論考の目的は、深い解釈と厚い記述を実現するために、M-GTAの分析ワークシートと他分野の分析概念群を接合することを提案し、その効果を論証することであった。上述してきたように、目的は一定程度果たせたと考えられる。

社会学を中心に、ライフストーリーの分析・解釈に、ゴッフマンのフレームを援用する研究（青山，2015）が示されたり、ベイトソン（1972）のフレームが導入されたり（桜井，2002）と社会学的研究と言語（非言語）から社会・文化などを読み解く分析概念を接合する試みが2000年代に入って行われている。本試論はそのような試みの1つであると位置づけることができ、今後もこのような試みを継続し、その可能性と課題を示したい。

引用文献

- 青山陽子（2015）。「インタビューという会話の構造を動的に分析する」桜井厚・石川良子（編）『ライフストーリーに何ができるか：対話的構築主義の批判的継承』（pp. 75-96）新曜社。
- Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. Chicago, London: The University of Chicago Press.
- Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. Los Angeles; London; New Delhi; Singapore; Washington DC: Sage.

- Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures*. New York: Basic Books, Inc.
- Glaser, B. (1978). *Theoretical sensitivity: Advances in the methodology of grounded theory*. Mill Valley: The Sociology Press.
- Glaser, B. (1992). *Basics of grounded theory analysis: Emergence vs. forcing*. Mill Valley: The Sociology Press.
- Glaser, B., & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. New York: Aldine Publishing Company.
- Goffman, A. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. New York, NY: Cambridge University Press.
- 井出里咲子（2003）。「場面の手がかり」小池生夫（編集主幹）井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修（編）『応用言語学事典』（p. 223）研究社。
- 石黒武人・山下早代子・川成美香（2012）。「英米語学科 UCLA 奨学研修参加学生の経験：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる説明モデルの構築」『明海大学外国語学部論集』第24巻，109-130頁。
- 木下康仁（2003）。「『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践-質的研究への誘い』」弘文堂。
- 木下康仁（編著）三毛美予子・小嶋章吾・寫末憲子・都筑千景・水戸美津子・佐川佳南枝・小倉啓子・酒井都仁子・岡田加奈子・中川薫（2005）。「『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』」弘文堂。
- 木下康仁（2007）。「『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』」弘文堂。
- 木下康仁（2009）。「『質的研究と記述の厚み：M-GTA・事例・エスノグラフィー』」弘文堂。
- 木下康仁（2014）。「『グラウンデッド・セオリー論』」弘文堂。

- Kramsch, C. (1998). *Language and culture*. New York: Oxford University Press.
- 戈木クレイグヒル茂子 (2006). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：理論を生み出すまで』新曜社.
- 桜井厚 (2002). 『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せいか書房.
- 桜井厚 (2005). 「ライフストーリーから見た社会」山田富秋 (編) 『ライフストーリーの社会学』 (pp. 10-27) 北樹出版.
- 佐藤郁哉 (2008). 『質的データ分析：原理・方法・実践』新曜社.
- シルヴァスティン, M.・小山亘 (編)・榎本剛士・古山宜洋・小山亘・永井那和 (共訳) (2009). 『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡：シルヴァスティン論文集』三元社.
- Strauss, A. (1987). *Qualitative analysis for social scientists*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. New York: Sage Publications.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory (2nd ed.)*. New York: Sage Publications.
- 高木佐知子 (2008a). 「フレーム」林宅男 (編著) 『談話分析のアプローチ』 (pp. 222-225) 研究社.
- 高木佐知子 (2008b). 「メタメッセージ」林宅男 (編著) 『談話分析のアプローチ：理論と実践』 (pp. 237-240) 研究社.
- 梅本仁美 (2008). 「フッティング」林宅男 (編著) 『談話分析のアプローチ：理論と実践』 (pp. 215-218) 研究社.